

英語の埋め込み節と補文標識 That

高 安 和 子

初めに

英語には、定形の埋め込み節がthatという補文標識によって導入されている文が存在するが、定形の埋め込み節が補文標識によって導入されていない文も存在する。文の中に認められる定形の埋め込み節が文の中で占める位置と定形の埋め込み節を導入する補文標識thatの有無の関係について考察することが、本稿の目的である。

1. 補文標識 that を伴う埋め込み節

1. 1. 動詞の補部の位置

英語には、動詞の補部(complement)の位置を占める埋め込み節 (embedded clause) が、補文標識(complementizer)のthatによって導入されている平叙文(declarative sentence)が存在する。

- (1) He knows [that she is right]. (Huddleston & Pullum (2002:949))
- (2) He thinks [that she is here]. (Huddleston & Pullum (2002:950))
- (3) He insists [that she be here]. (ibidem)
- (4) You know [that I wanted that]. (ibidem)
- (5) He says [that they are in Paris]. (Huddleston & Pullum (2002:951))
- (6) One of them mentioned to me [that your secretary might be leaving]. (Huddleston & Pullum (2002:953))
- (7) She said [that because of the new regulations they had to lay off ten more staff]. (ibidem)
- (8) Everyone expected that he would resign. (Huddleston & Pullum (2002:958))
- (9) They told us that the battery was flat. (ibidem)
- (10) She suggested to me that he was ill. (Huddleston & Pullum (2002:959))
- (11) I gather from Kim that you are going to Paris. (ibidem)
- (12) I conclude from your silence that you have no objections. (ibidem)
- (13) I had organized with the secretary that the meeting should be postponed. (ibidem)
- (14) You told me that you would help. (ibidem)
- (15) I hope that this book you will read. (Doherty (1997:200))

- (16) She claims that Guinness he likes but that whisky he hates. (ibidem)
- (17) This proves that Joyce he'd read but that Yeats he hadn't. (ibidem)
- (18) She prayed that next Wednesday the check would arrive. (Doherty (1997:202))
- (19) We concluded that in the future he should be closely watched. (ibidem)
- (20) We maintain that in London a nice flat is hard to find. (ibidem)
- (21) John claims that during the party John threw a punch at Fred. (ibidem)
- (22) She says that when we get home things will be different. (Doherty (1997:203))
- (23) I believe that next year she'll be fine. (ibidem)
- (24) I suppose that ordinarily you would go somewhere else. (ibidem)
- (25) He thinks that in some circumstances things would be better. (ibidem)
- (26) I said to Mary that he was in error. (Doherty (1997:210))
- (27) The reason he resigned was that he didn't get on with the boss.
(Huddleston & Pullum (2002:959))
- (28) What she said was that she'd be contacting us later in the day. (ibidem)
- (29) What is even more disturbing is that the neighbours hadn't noticed his absence. (Huddleston & Pullum (2002:958))
- (30) What the students believe is [_{CP} that [_{IP} they will pass the exam]]. (Bošković & Lasnik (2003:529))

平叙文である(1)の文において、主節の動詞knowsの補部の位置に埋め込まれている節であるthat she is rightは、補文標識のthatによって導入されている。また、(2)から(30)の平叙文においても、同様に、主節の動詞の補部の位置を占める埋め込み節が補文標識のthatによって導入されている。

平叙文の主節の動詞の補文標識thatによって導入されている補部節が、その動詞に後続するのではなく、話題化(topicalization)の適用によって主節の主語の前(文頭)の位置を占めている文が存在する。

- (31) [_{CP} That [_{IP} John likes Mary] Jane didn't believe. (Bošković & Lasnik (2003:529))

(31)においては、主節の動詞believeの補部節That John likes Maryが、主節の主語のJaneの前の位置を占めている。

1. 2. 主語の位置

英語には、主語の位置を占める埋め込み節が、補文標識のthatによって導入されている平叙文が存在する。

- (32) [That they were lying] is now quite obvious. (Huddleston & Pullum (2002:952))
- (33) That the work might be a forgery simply hadn't occurred to us.

(Huddleston & Pullum (2002:957))

(34) That she did everything in her power to help cannot be doubted. (ibidem)

(35) That they haven't replied doesn't worry her. (ibidem)

(36) That the project has not been properly costed and that the manager is quite inexperienced are just two objections to your proposal. (ibidem)

(37) [_{CP}That [_{IP}he liked linguistics]] was widely believed. (Bošković & Lasnik (2003:527))

(32)においては、補文標識のthatによって導入されている埋め込み節That they were lyingが、主節の主語の位置を占めている。(33)から(37)においても、同様に、補文標識thatによって導入されている埋め込み節は、主節の主語の位置を占めている。

1. 3. 外置された主語の位置

英語には、外置された主語 (extraposed subject) の位置に that によって導入されている埋め込み節が存在する文が認められる。

(38) It is hardly surprising that he tried to retract his statement. (Huddleston & Pullum (2002:960))

(39) It cannot be doubted that she did everything in her power to help. (ibidem)

(40) It simply hadn't occurred to us that the work might be a forgery. (ibidem)

(41) It is clear [that he made a mistake]. (Huddleston & Pullum (2002:949))

(38)において、下線が引かれている補文標識のthatによって導入されている埋め込み節は、主節の末尾の位置を占める外置された主語である。Huddleston & Pullum (2002)は、補文標識のthatによって導入されている埋め込み節が、主節の主語の位置、言い換えると、Itが占める位置に存在する文よりも、主節の主語として働く節が主節の末尾の位置を占める(38)から(41)までのような文の方が、はるかによく使用されると述べている。¹⁾

1. 4. 名詞の補部の位置

補文標識のthatによって導入されている埋め込み節は、名詞の補部の位置を占めることができる。

(42) I heard about the proof that Mary did it. (Bošković & Lasnik (2003:534))

(43) I heard about the fact that Mary did it. (ibidem)

(44) [The thought that we might need him] had simply never occurred to him.

(Huddleston & Pullum (2002:964))

(45) He expressed [the opinion that we should advertize the position overseas]. (ibidem)

(42)においては、補文標識のthatによって導入されている埋め込み節that Mary did itが、名詞proofの補部の位置を占めている。(43)から(45)においても、同様に、補文標識thatによって

導入されている埋め込み節は、それぞれ、名詞の *fact*, *thought*, *opinion* の補部の位置を占めている。

1. 5. *wh* 疑問文

英語には、主節の動詞の補部の位置を占める埋め込み節が、補文標識の *that* によって導入されている *wh* 疑問文が存在する。

(46) What did you confess that you had done? (Matthews (1981: 192))

(47) Whom_i do you think [_{CP} that [_{IP} Lord Emsworth will invite t_i]]? (Haegeman (1991: 362))

(48) What_i do you believe [that Mary painted t_i] (Manzini (1992: 56))

(49) Who do you think [that [John saw t]] (Lasnik and Uriagereka (1988: 94))

(46)は、主節の動詞である *confess* の補部として機能している補文標識の *that* を伴う埋め込み節の動詞 *done* の目的語が、その埋め込み節から上位の節に抜き出されている *wh* 疑問文である。(47)から(49)の文も、(46)と同様に、主節の動詞の補文標識 *that* を伴う補部節の中に存在する動詞の目的語が、その埋め込み節から上位の主節に抜き出されている。

2. 補文標識 *that* を伴わない埋め込み節

2. 1. 補文標識 *that* の任意の省略

英語には、定形の埋め込み節が、補文標識の *that* によって導入されていない平叙文が存在する。これについて、Huddleston & Pullum (2002)は、フォーマル・スタイルよりもインフォーマル・スタイルにおいて補文標識の *that* を伴わない節が使用されると述べている。また、その他の要因として、主節の構造と内容節 (*content clause*) である埋め込み節の構造が、補文標識 *that* の任意の省略の可能性に関係していると説明している。²⁾

(50) He knows [(that) she is right]. (Huddleston & Pullum (2002:949))

(51) He thinks [(that) Max is the ringleader]. (Huddleston & Pullum (2002:953))

(52) He says [(that) they are in Paris]. (Huddleston & Pullum (2002:951))

(53) It's a good job [we left early]. (Huddleston & Pullum (2002:953))

(50)において、主節の動詞 *knows* の補部の位置を占める下線が引かれている定形の埋め込み節を導入する補文標識の *that* を、省略することができる。(51)と(52)においても、同様に、主節の動詞の補部節を導入する補文標識の *that* を、省略することができる。(53)は、主節の末尾の位置を占める外置された主語である埋め込み節に、補文標識の *that* が存在しない例である。この外置された主語である埋め込み節の補文標識 *that* について、Doherty(1997)は、主節の動詞に後続する位置で補文標識の *that* を省略できないとする例を挙げている。³⁾

(54) It bothers me *(that) it's so mild in November. (Doherty (1997:205))

この文の非文法性は、Huddleston & Pullum (2002)が補文標識thatの省略の可能性には主節の構造が関わっているとする分析によって、説明することができる。

(55) It distresses me [that he is trying to lay the blame for the accident on us].

(Huddleston & Pullum (2002:953))

2. 2. 補文標識thatの省略の禁止

英語には補文標識thatの省略を許さない定形の埋め込み節を含む文が存在する。Doherty(1997)は、補文標識thatを伴わない定形節は文頭の位置を占めることができないという観察を示している。⁴⁾

(56) *(That) Clinton will be re-elected is very likely. (Doherty(1997:205))

(57) *(That) he would never do that again, Bill promised. (ibidem)

(56)と(57)において、文頭の埋め込み節を導入する補文標識thatを省略することはできない。

Dohertyは、話題(topic)として機能する表現が主節の中に埋め込まれている定形節に関連付けられている場合は、補文標識のthatが存在しない文は容認されないと述べている。⁵⁾

(58) *I hope *this book* you will read. (Doherty(1997:201))

(59) *She claims *Guinness* he likes but *whisky* he hates. (ibidem)

(60) *This proves *Joyce* he'd read but *Yeats* he hadn't. (ibidem)

Bošković & Lasnik (2003)は、擬似分裂文(pseudoclefting)、右枝節点繰り上げ(right node raising)、空所化(gapping)が適用された文において、主節の動詞の補部である埋め込み節を導入する補文標識thatを省略することはできないと述べている。⁶⁾

(61) *What the students believe is [_{CP} C [_{IP} they will pass the exam]]. (Bošković & Lasnik (2003:529))

(62) *They suspected and we believed [_{CP} C [_{IP} Peter would visit the hospital]]. (ibidem)

(63) *Mary believed Peter finished school and Bill [_{CP} C [_{IP} Peter got a job]]. (ibidem)

擬似分裂文、右枝節点繰り上げ、空所化がそれぞれ適用された(61)から(63)において、補文標識Cが占める位置の補文標識thatを省略することはできないということである。

Bošković & Lasnikは、また、補文標識thatを省略することができない位置として名詞の補部の位置を挙げている。

(64) *I heard about the proof C Mary did it. (Bošković & Lasnik (2003:534))

(65) *I heard about the fact C Mary did it. (ibidem)

(64)において、名詞proofの補部の位置を占める埋め込み節の中の補文標識Cの位置で、補文標識のthatを省略することはできない。(65)においても、同様に、名詞factの補部の位置を占める埋め込み節の中の補文標識Cの位置で、補文標識のthatを省略することはできない。⁷⁾

2. 3. wh疑問文

英語には、主節の動詞の補部の位置を占める埋め込み節が、補文標識の *that* を伴わない *wh* 疑問文が存在する。

(66) What did he think had happened? (Huddleston (1984: 370))

(67) Who did you say was waiting for me? (McCawley (1988: 474))

(68) What do you think Lee bought? (Browning (1996: 237))

(66)は、動詞 *think* の補文標識 *that* を伴わない補部節の主語 *what* が、上位の節に抜き出されている *wh* 疑問文である。(67)においては、動詞 *say* の補文標識 *that* を伴わない補部節の主語 *who* が、上位の節に抜き出されている。また、(68)は、動詞 *think* の補部節である *that* を伴わない埋め込み節の中に存在する動詞 *bought* の目的語の *what* が、上位の節に抜き出されている *wh* 疑問文である。動詞の補部の位置を占める補文標識 *that* を伴わない埋め込み節の中に存在する動詞の目的語が、その埋め込み節から上位の節に抜き出されていると分析される文が存在する。

この言語事実に対して、英語の動詞の補部の位置を占める補文標識 *that* を伴う埋め込み節の主語は、その埋め込み節から上位の節に抜き出すことができないという言語事実が存在する。

(69) *Who do you think [that *t* saw Bill] (Lasnik and Uriagereka (1988: 94))

(70) *Who did you say that was waiting for me? (McCawley (1988: 474))

(71) *Who do you believe [that *t* is a painter] (Manzini (1992: 13))

(69)の動詞 *think* の補部節である補文標識 *that* を伴う埋め込み節の主語 *who* は、痕跡 *t* が占める位置から上位の節に抜き出すことができない。(70)の動詞 *say* の補部節である補文標識 *that* を伴う埋め込み節の主語 *who* は、上位の節に抜き出すことができない。(71)の動詞 *believe* の補部節である補文標識 *that* を伴う埋め込み節の主語 *who* は、痕跡 *t* が占める位置から上位の節に抜き出すことができない。

3. 補部として働く定形の埋め込み節の構造

これまでに英語の文に含まれる定形の埋め込み節の位置と文法上の機能と補文標識の *that* の有無について見てきた。

英語には、動詞の補部の位置を占める埋め込み節が、補文標識の *that* によって導入されている平叙文が存在する。

(72) He knows [that she is right]. (Huddleston & Pullum (2002:949))

この補文標識の *that* が存在する文に対応する定形の埋め込み節が、補文標識の *that* によって導入されていない平叙文が存在する。

(73) He knows [that she is right]. (Huddleston & Pullum (2002:949))

英語には、主語の位置を占める埋め込み節が、補文標識の that によって導入されている平叙文が存在する。

(74) [That they were lying] is now quite obvious. (Huddleston & Pullum (2002:952))

主語の位置は、通常、文頭の位置であるが、話題も文頭の位置を占める。補文標識 that を伴わない定形節は、主語と話題の機能を果たす要素が占める位置である文頭の位置を占めることができない。

(75) *(That) Clinton will be re-elected is very likely. (Doherty(1997:205))

(76) *(That) he would never do that again, Bill promised. (ibidem)

更に、話題として機能する表現が、主節の中に埋め込まれている定形節に関連付けられている場合は、補文標識の that が存在しない文は容認されない。

(77) * I hope *this book* you will read. (Doherty(1997:201))

英語には、外置された主語の位置に that によって導入されている埋め込み節が存在する文が認められる。

(78) It is hardly surprising that he tried to retract his statement. (Huddleston & Pullum (2002:960))

補文標識の that によって導入されている埋め込み節は、名詞の補部の位置を占めることができる。

(79) I heard about the proof that Mary did it. (Bošković & Lasnik (2003:534))

この名詞の補部の位置で補文標識 that を省略することはできない。

(80) *I heard about the proof C Mary did it. (Bošković & Lasnik (2003:534))

英語には、主節の動詞の補部の位置に補文標識の that を伴う埋め込み節が存在し、その節の動詞の目的語が上位の節に抜き出されている wh 疑問文が存在する。

(81) What did you confess that you had done? (Matthews (1981: 192))

これに対して、主節の動詞の補部の位置に補文標識の that を伴わない埋め込み節が存在し、その節の主語が上位の節に抜き出されている wh 疑問文が存在する。この場合、埋め込み節が補文標識 that を伴うと非文法的な文となる。

(82) What did he think had happened? (Huddleston (1984: 370))

(83) *Who do you think [that [*t* saw Bill]] (Lasnik and Uriagereka (1988: 94))

擬似分裂文 (pseudoclefting), 右枝節点繰り上げ (right node raising), 空所化 (gapping) が適用された文において、主節の動詞の補部である埋め込み節を導入する補文標識 that を省略することはできない。

(84) * What the students believe is [_{CP} C [_{IP} they will pass the exam]]. (Bošković & Lasnik (2003:529))

(85) * They suspected and we believed [_{CP} C [_{IP} Peter would visit the hospital]]. (ibidem)

(86) *Mary believed Peter finished school and Bill [_{CP} C [_{IP} Peter got a job]]. (ibidem)

Doherty (1997)は、英語の補文標識を伴わない定形の従属節は、CPではなくIPであるというIP仮説(IP-hypothesis)を主張をしている。⁸⁾

(87) John says [_{IP} the key opens the chest]. (Doherty (1997:198))

Doherty (1997)は、英語の補文標識thatを伴う定形の従属節と伴わない定形の従属節の機能の違いを生じる要因は、補文標識thatを伴う定形の従属節は補文標識句(CP)であるということと、補文標識thatを伴わない定形の従属節は屈折句(IP)であるということであると述べている。Bošković & Lasnik (2003)はDoherty (1997)と異なる分析を行っている。Bošković & Lasnik (2003)は、英語の空補文標識(null complementizer)の分布の説明を行っている。補文標識thatを伴わない定形の従属節の非文法性を、補文標識thatが存在しない位置に空補文標識を設定することにより説明している。

(88) [_{CP} C [_{IP} He liked linguistics]] was widely believed. (Bošković & Lasnik (2003:527))

1.と2.で観察したように、英語の補文標識thatの出現の有無については様々な制約が関与している。また、英語の補文標識thatを伴わない定形の埋め込み節の構造については、補文標識句であるという立場と屈折句であるという立場があるが、この点については、生成文法のミニマリズムの観点から更に検討すべきである。

注

1. Huddleston & Pullum (2002:960)
2. Huddleston & Pullum (2002:953)
3. Doherty(1997:204-205)
4. Doherty(1997:204-205)
5. Doherty(1997:200-201)
6. Bošković & Lasnik (2003:529)
7. Bošković & Lasnik (2003:534)
8. Doherty (1997:198)

References

- Bresnan, J. (1977) "Variables in the Theory of Transformations," in P.W.Culicover, T.Wasow, and A.Akmajian, eds., *Formal Syntax*, Academic Press, New York.
- Bošković, Ž. and H. Lasnik (2003) "On the Distribution of Null Complementizers," *Linguistic Inquiry*, 34, 527-546.
- Browning, M. A. (1996) "CP Recursion and *that-t* Effects," *Linguistic Inquiry*, 27, 237-255.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*, The MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, N. and H. Lasnik (1977) "Filters and Control," *Linguistic Inquiry*, 8, 425-504.
- Culicover, P. W. (1993) "Evidence against ECP Accounts of the *that-t* Effect," *Linguistic Inquiry*, 24, 557-561.
- Doherty, C. (1997) "Clauses without complementizers: Finite IP-complementation in English," *The Linguistic Review*, 14, 197-220.
- Haegeman, L. (1991) *Introduction to Government & Binding Theory*, Basil Blackwell, Oxford.
- Huddleston, R. (1984) *Introduction to the Grammar of English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Lasnik, H. and J. Uriagereka (1988) *A Course in GB Syntax*, The MIT Press, Cambridge.
- Manzini, M. R. (1992) *Locality*, The MIT Press, Cambridge.
- Matthews, P. H. (1981) *Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
- McCawley, J. D. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Rizzi, L. (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," in L. Haegeman ed., *Elements of Grammar*, Kluwer, Dordrecht.
- Sobin, N. (2002) "The Comp-trace effect, the adverb effect and minimal CP," *Journal of Linguistics*, 38, 527-560.